

歯科の麻酔 について

長崎県歯科医師会
医療情報委員会 委員

白石 一氏



通常の麻酔は浸潤麻酔^{しんじゆんますい}

歯科治療の際に行われる麻酔は一般的に浸潤麻酔^{しんじゆんますい}という方法です。これは治療する歯の近くの歯茎に注射をして骨に麻酔薬を浸透させて骨の中の神経に麻酔を作用させる方法です。

この注射が嫌いという人も多いと思いますが、

注射の前に歯茎に表面麻酔薬を塗ることや、電動の注射器を使用して麻酔薬を注入する速度をコントロールすることで麻酔の際の痛みや不快感を軽減することができます。

麻酔でドキドキする？

もちろん、治療に対する恐怖心から麻酔後に動悸がする場合もありますが、通常使用する麻酔薬の中にはエピネフリンという成分が入っています。これは麻酔の効果を高めるために添加されている血管収縮薬です。組織に入った薬液はやがて拡散し、血行を介して吸収され効果がなくなります。血管収縮薬は麻酔の濃度が低下

するのを防ぎ、結果として麻酔の効果が持続します。このエピネフリンが心臓に作用して動悸がすることがあります。ほとんどの場合、安静にしていれば自然と治まりますが、歯科医院ではエピネフリンが添加されていない麻酔薬も用意されているので循環器系に病気をお持ちの方などは事前にお伝えください。

麻酔が効きにくい時とは

治療のときに麻酔が効かずに大変な思いをした人もいらっしゃると思います。麻酔が効きにくい場合には以下のような原因が考えられます。

① 下の奥歯の治療

下の奥歯の周りの骨は非常に厚く硬いために麻酔薬が浸透しにくいです。このような時は下顎孔伝達麻酔^{かがくこうでんたつますい}や歯根膜内麻酔^{しこんまくないますい}など別の麻酔を行う事で対応します。下顎孔伝達麻酔とは下顎の骨の神経の根元に麻酔をする方法で針を刺す場所は下の奥歯の更に奥の粘膜になります。(図1) 歯根膜内麻酔とは歯と周りの骨の間にある歯根膜腔に麻酔をする方法です。(図2) 浸潤麻酔が奏功しない場合はこのような麻酔を追加して行うことで痛みがなく治療ができることが多いです。

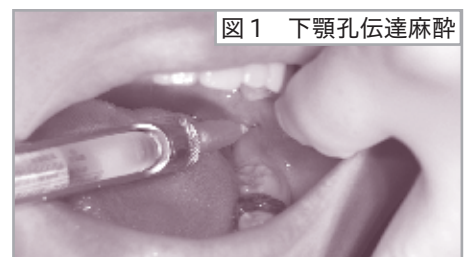


図1 下顎孔伝達麻酔

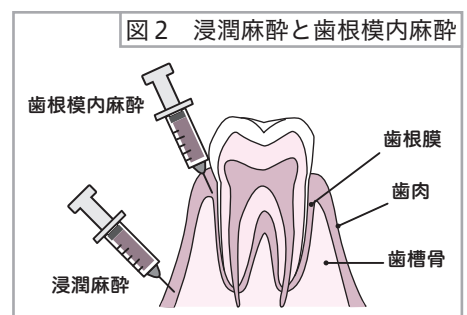


図2 浸潤麻酔と歯根膜内麻酔

② 痛みが強い時や腫れているとき

治療する歯の周囲の組織の pH が低くなる（酸性に偏る）と麻酔は効きにくくなります。歯や周囲の組織に炎症があると組織の pH が低くなるので、痛みがあったり、腫れたりしている部位は麻酔が効きにくくなります。そのような場合は、まず痛み止めや抗生剤を処方して痛みや炎症が治まってから後日に治療をすることもあります。

③ 痛みに対して過敏になっているとき

麻酔が効いているのに「痛い」と感じている場合です。自分は麻酔が効かないと思い込んでいたり、治療に対する恐怖心があったりすると、不安になり痛みに対して敏感になります。鎮静剤の投与や笑気ガスの使用、また麻酔の量を増やすこともありますが、前述の理由を理解してもらうと問題なく処置できることもあります。

安全に治療を受けていただくために

歯科医院でも万全の注意を払って治療をおこなっていますが、より安全に治療を受けていただくためには問診の際に病歴や過去の麻酔の経験、麻酔の際に気分が悪くなったことなどがあればしっかりとお伝えください。また、治療に対して非常に恐怖心が強いことや、治療中に痛みがあることは遠慮なく申し出ただけければ、説明したように様々な対応ができますのでストレスなく治療することが可能です。

歯科治療に対する恐怖心が強く、しばらく歯科を受診していない方などは、ぜひお近くの歯科医院を訪ねてみてはいかがでしょうか。